

4. 島田市の歴史的背景

島田市の歴史文化は、東海道と大井川の東西、南北の交流によって培われてきました。原始・古代から現代までヒト・モノの交流が盛んに行われ、大井川流域の両岸にそれぞれ特色のある歴史文化を育みました。以下、その時代ごとの概略を説明します。

(1) 大井川流域の原始古代の足跡（旧石器～古墳時代）

日本に人類が住み始めたのは約10万年前の更新世の時代とされ、その当時は日本列島が大陸と地続きだったため、ナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物を追って移り住んだと考えられています。当時の人々は野山で植物性食糧を採取し、石を打ち砕いて作ったナイフ形石器や尖頭器などの道具を用いて狩猟を行い、動物性食糧を得ていました。

島田市においても、大井川左岸にある伊太の大鳥遺跡おおとりの発掘調査でナイフ形石器や尖頭器が見つかっており、その形態から約1万8,000年前のものとされ、市内においては最も古い人類の痕跡とされています。このほか、大井川右岸の御小屋原遺跡みこやばらや東鎌塚原遺跡ひがしかまつかばらでも発掘調査でこの時代のナイフ形石器が発見されており、大井川の水辺に近い場所で狩猟採集の暮らしが行われていたことがうかがえます。

今から約1万年前の完新世の時代になると、気候が温暖になり、海面が上昇して日本列島は大陸と切り離され、現在の自然環境となりました。この時代も狩猟採集の生活が行われましたが、川や海では魚や貝、海藻などを採る漁労も活発になり、食糧の獲得方法が多様化しました。安定した食料の確保ができるようになったことで、人々は竪穴住居を建てて定住するようになり、数棟の住居がまとまって暮らす集団生活が営まれました。また、石器だけでなく動物の骨を用いた骨角器こつかくきや、土を焼いた土器の使用も始まりました。特に土器の表面に縄目の紋様が施されたことから、この時代を縄文時代と呼んでいます。

この頃、島田市を含む志太平野しのだは、温暖化による海面の上昇によって大井川からの河水と駿河湾からの海水が入り交じる大きな河口湾ようになっていたと考えられます。島田市内では大井川とその河口湾を見下ろす場所で縄文時代の遺跡が見つかっており、当時の人々が水辺に近い高台で生活を営んでいたと思われます。



写真 1-5 大鳥遺跡出土の石器



写真 1-6 御小屋原・東鎌塚原遺跡出土の石器

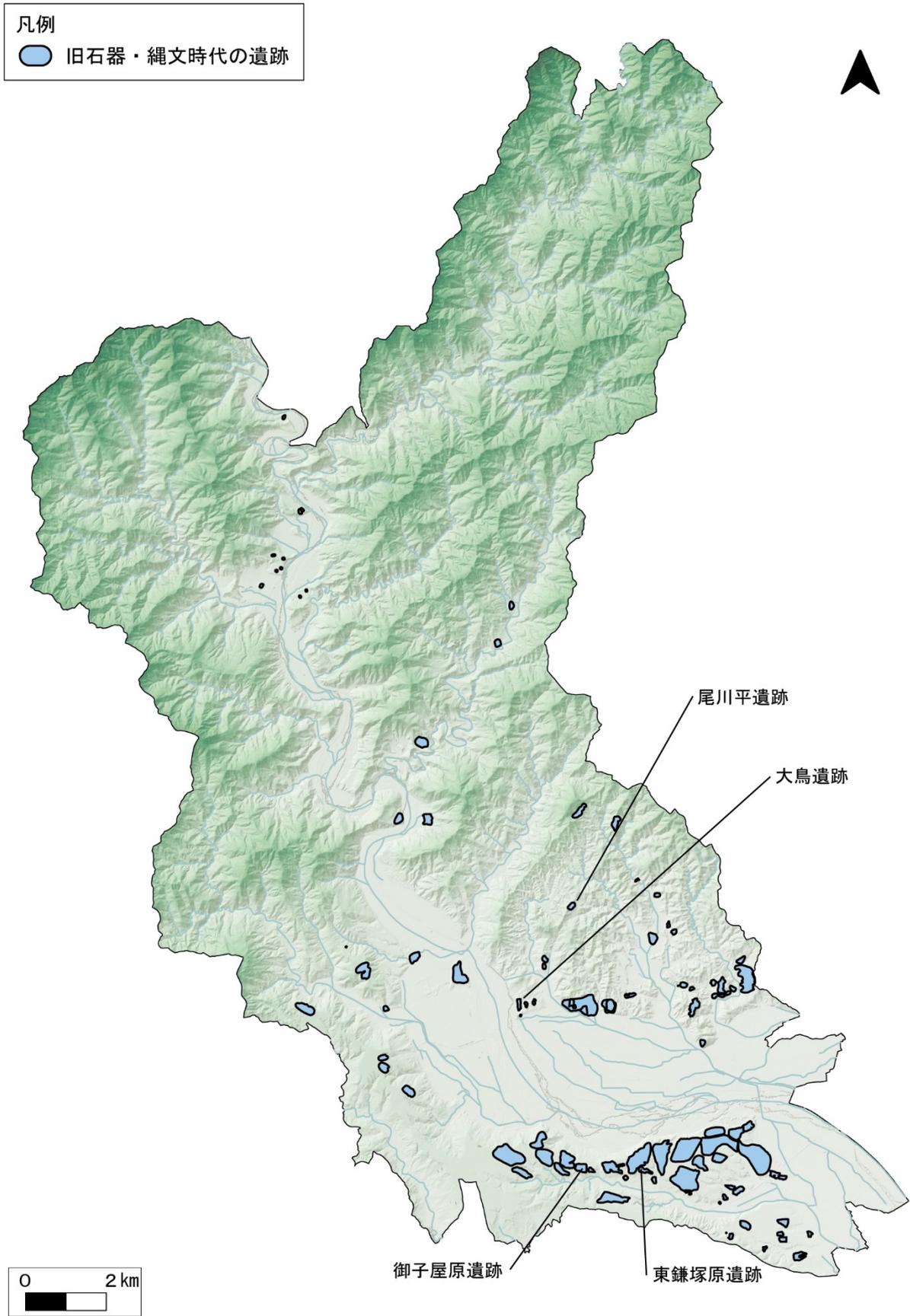


図 1-13 旧石器・縄文時代の遺跡

第1章 島田市の概要

今からおよそ 2,700 年前になると、すでに農耕文化が行われていた中国大陸から人々が移り住み、^{すいとこうさく}水稲耕作と青銅器や鉄器の使用を特徴とする弥生文化が成立し、西日本から東日本へ伝わりました。土器も煮炊き用の甕^{かめ}や貯蔵用の壺、鉢や高^{たか}環などの素焼きの弥生土器が用いられるようになりました。

縄文時代に続き弥生時代においても大井川を望む高台に弥生時代の集落遺跡が見つかります。大井川右岸の初倉地区については大井川の支流である湯日川の河岸段丘^{かがんだんきゅう}や牧之原台地の丘陵^{きゅうりょうとつたん}突端などでも遺跡が見つかります。いずれも、河川に面した場所に集落がつけられ、時代が経るにつれ、その規模は大きくなっていきました。弥生時代後期の駿河山遺跡^{するがやま}では大きな^{たてあな}竪穴住居跡以外にも、周囲に溝を掘った方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}が複数確認されています。

大陸から水稲耕作が伝わり、ムラの中のリーダーを中心に集団農法が行われるようになると、次第に余剰生産物が蓄えられ、徐々にリーダーの元に富と権力が集中するようになっていきました。リーダーの中には複数のムラのリーダーをさらにまとめるリーダーもうまれ、複数のムラからなるクニが形成されました。こうしたリーダーの中には方形周溝墓に代わって、富と権力を象徴するような巨大化した古墳を築くものが現れました。

島田市ではこの頃、方形周溝墓の流れを汲む方墳が現れます。この頃の古墳は木製の^{ひつぎ}柩に遺体を納め、その柩を古墳に埋葬する形でしたが、6世紀頃になると棺を納めるための^{よこあなしき}横穴式石室^{せきしつ}を設けた古墳が作られました。大井川右岸では、前方後円墳の愛宕塚古墳^{あたごづか}も築造されるなど、ヤマト王権の影響がみられます。また、時代が経るにつれ、古墳の築造が広まり、複数の古墳がまとまって築かれた古墳群が集落を見下ろす高台や山の斜面に作られました。御小屋原古墳群には納められた副葬品に、ペルシャ地方に源流を持つパルメット文様の細工に金メッキを施した豪華な^{くつわ}轡^{くつわ}も見つかっており、大陸からの影響がうかがえます。



写真 1-7 東鎌塚原遺跡の六角形竪穴住居跡



写真 1-8 駿河山遺跡の方形周溝墓



写真 1-9 御小屋原古墳出土馬具



写真 1-10 愛宕塚古墳

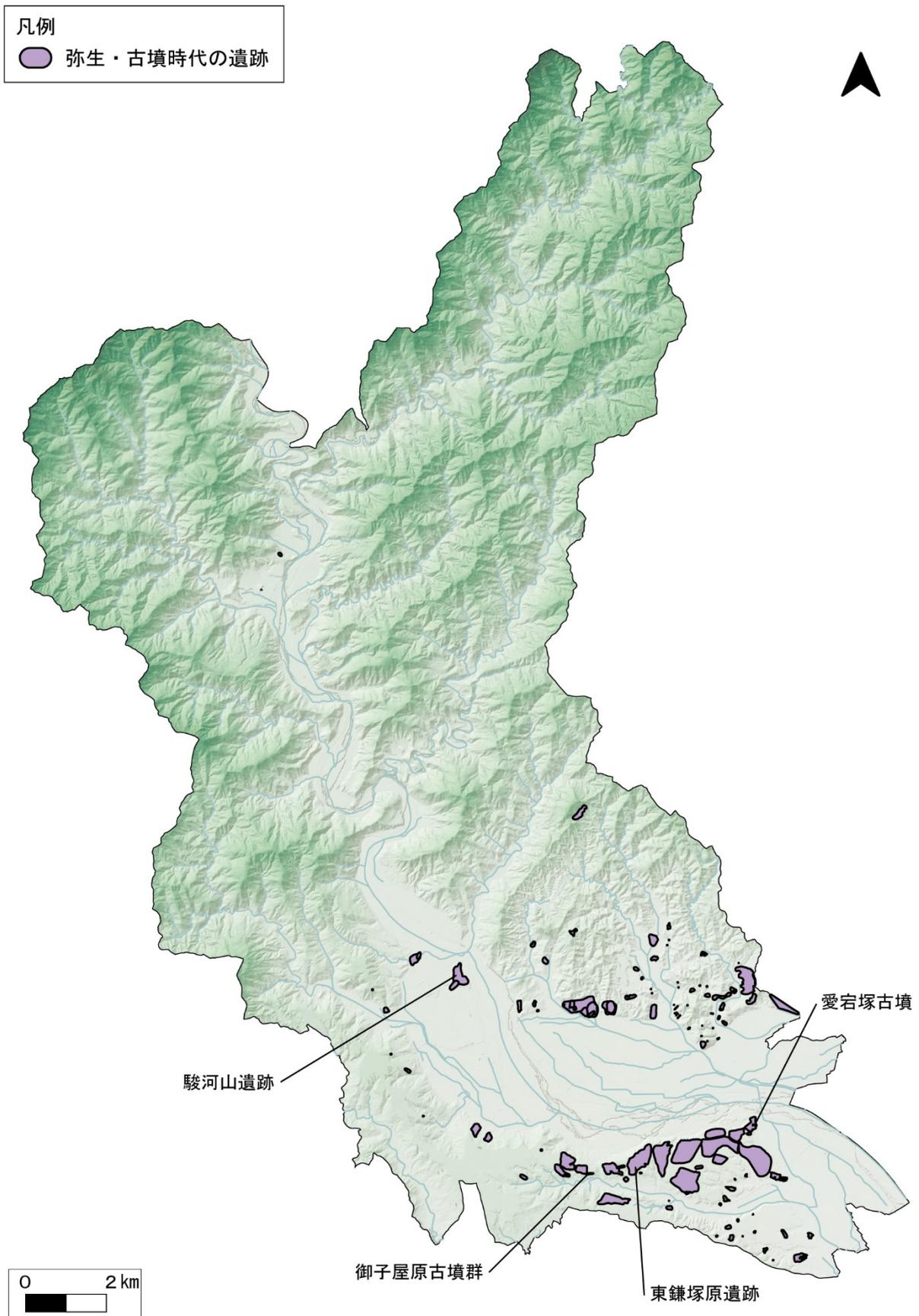


図 1-14 弥生・古墳時代の遺跡

(2) 古代の東海道の成立と島田（奈良・平安時代）

7世紀半ば、朝鮮半島の政情の変化を受けて大和朝廷でも中央集権化が進み、全国が五畿七道の行政区に編成され、この地域を含む太平洋沿岸の東日本は東海道とされました。さらに国郡里の行政区に分けられると、島田市の中央部を流れる大井川は駿河国と遠江国を隔てる国境となりました。古墳時代からのムラやクニは里(郷)や郡に編成され、ムラのリーダーは里長に、複数のムラをまとめるリーダーは郡司に任命されました。時代は下りますが、10世紀中頃に書かれた『倭名類聚抄』には、大井川左岸は駿河国志太郡大長郷（現:相賀・牛尾地区）、大津郷（大草・尾川・落合・野田地区）、葦原郷（阿知ヶ谷地区）の地名が見え、右岸では遠江国菟原郡質侶郷（金谷・五和地区）や駅家郷（初倉地区）の地名が記されており、7世紀後半から8世紀にかけて、現代に繋がる行政区が設置されたことが分かります。川根地区の大井川右岸は元慶5（881）年に磐田郡を分割して置かれた山香郡の与利郷として編成されました。

また、同時に都から各国に地方行政官の国司を派遣し、地方からは都に税を納めるための交通路（東海道）が整備されました。10世紀にまとめられた『延喜式』には、牧之原台地の初倉地区に「遠江国初倉駅」の記述があり、官人が公文書を継送りするため、馬を乗り継いだ駅家が置かれたことが分かっています。同地区の宮上遺跡からは発掘調査で奈良時代の住居跡から「驛」と墨書された土器が、隣接する青木原遺跡からは、当時貴重な円形の硯（円面硯）が発見され、大和朝廷の中央集権国家体制に組み込まれていたことがうかがえます。文化面ではそれまでの古墳に代わって地方豪族の氏寺が建立されています。初倉地区では瓦葺きの金堂や塔の伽藍を配した寺院（竹林寺廃寺）が天平年間（729～749）に、大津地区では天平宝字3（758）年に鶴田寺が建てられています。

奈良時代からすでに進んでいた口分田等の私有地化は、地方に赴任した国司らのもとでさらに進み、各地に荘園が形成されました。やがてこれらの荘園は朝廷からの支配を逃れるため、有力な寺社や藤原氏の摂関家、上皇など権門勢家に寄進され国家の支配から離れていきました。

大井川右岸の質侶郷は11世紀初めに遠江守として赴任した大江公資の私領（荘園）となりました。間もなく、太政大臣藤原道長の六男長家にこれを寄進し、自らは領家として国司の任を離れても介入を拒んで質侶荘からの収入を得るなど、平安時代の質侶荘は貴族社会を支える荘園制度に組み込まれていきました。

11世紀半ば、大津郷には伊勢神宮の荘園である大津御厨が置かれました。大津谷川に面する居倉遺跡からは「大津」と記された木簡も発掘調査で見つかっています。また、この頃伊太丘陵では灰釉を施した陶器の生産が盛んに行われ、50基にも及ぶ窯跡が確認されています。

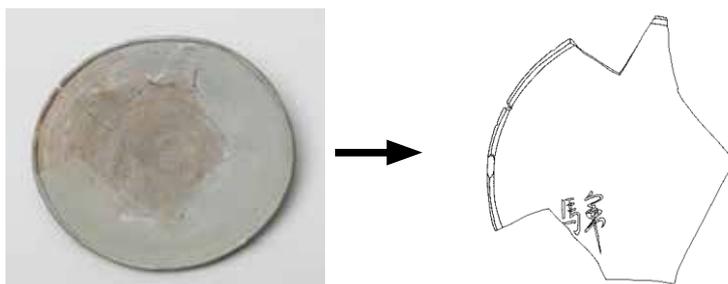


写真 1-11 宮上遺跡出土墨書土器「驛」



図 1-15 奈良・平安時代の遺跡